

第二章 考古学からみた日高町

第一節 日高町の縄文遺跡

考古学とは

日高町の町域をつくる気多郡という郡名や、この気多郡の郡名と一致する皇族の名が知られるのは、文献のうえでは、八世紀からのことだ。それでは、それ以前、この日高の町において歴史といいうものを伝える資料がないのかといえば、そうでない。歴史といいうものは、土地とその上に住みつく人間との相互関係の上に成立するものだから、文字に書かれた記録がないからといって、その様相が全く探れぬものではない。具体的に物や施設、即ち遺跡・遺物から出発して、遺跡と遺物の関係、遺物と遺物との随伴関係、層序関係を考慮して、相似点や相異点を摑みだし、生活の実際と発展を取り出すことも可能な筈だ。この試みは、考古学と名付けられる学問の分野に關係し、文字のない時代や、文字で記せられたものがあつても、それが乏しいような時代については、このように、遺跡・遺物 자체に過去を語らせようとするものである。文献による歴史学とは、方法論こそ異なれ、目的とするところは、全く同じで、文化の過去

を探究しようとするものだ。しかし、この考古学にたよれば、文字のない時代のことがすべて明らかになるかといえば、そうではない。考古学自身がもつ大きな制約がある。それは、遺跡・遺物から直接に文化の過去を探究しようとするにしても、その遺跡・遺物というものは、実は、たまたま保存されていたために、陽の目を見たものばかりに限られ、まだまだ地下深くねむっているものや、腐りはててしまったもの、探りあてられぬものについては、その考察が及ばぬということだ。

早い話が、今まで推定の域を出てなかつた但馬国分僧寺の寺域や伽藍配置が明らかになつたのは、昭和四十八年（一九七三）以来、十カ年計画で但馬国分寺跡調査委員会が学術的に行つた綿密な発掘調査の結果であつた。この調査がなければ、薬師堂の南約五十メートルの所に露出している礎石は、取り違えたまま引き続き塔心礎と考えられていることだろうし、ましてや、伽藍配置については、全く手がかりすら留めずにいる筈だ。遺跡や遺物が、我々の知見によつて、はじめて考古学は、その成果を結ぶ。それで、考古学の知見に基づいて論考を打ち立てようとするならば、現在のところ知られている資料に基づく限りでは、こうも考えられはしないかとの、但し書きが必要となつてくる。これは考古学が持つ学問的な宿命だが、この制約を考慮しつつ、現在的知見に基づく、日高町の町域の遺跡なり遺物を考古学的に探究して見よう。

先土器時代 神鍋山の噴煙が収まつたのは、約八千年から一万余年くらいのことだ。この少し前のころに、但馬に人間が住みついた痕跡が残つてゐる。それは、突端が、とがつた石ではあるが、その横面には、くつきりと石の表面を剝いだと思われる加工の痕が、いくつも残つてゐるもののが、この但馬

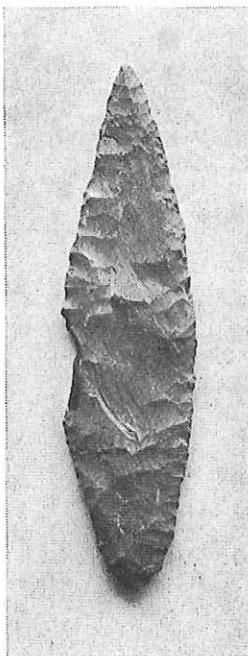


写真21 尖頭器
(養父町出土)

から検出されているからだ。この石の加工品、即ち石器を学術的には、尖頭器と呼んでいる。一般に人類が石の小片を素材にして、利器を作り出すようになった時代を、石器時代と呼びならわしているが、一万余年以上の昔のことだ。これはまた、旧石器時代・中石器時代・新石器時代に細分化され、その間、いくつかの特徴的な型をもつた石器が使用されていたが、土器はまだ顔を出していない時代だ。この無土器の時代、いわば土器の時代に先行する先土器の時代の終末ごろを特徴づけるのが、この尖頭器で、それが但馬でも僅か二例であるが、養父町と但東町から発見されていることは、無土器時代の終末期になつて、但馬の山間部に人間の姿がちらほら見えてきていることを証するものだ。尖頭器の文化は、日本列島の中でも、東の方が濃厚地帯だし、また、但馬の山地が、丹波山塊を仲介として、中部山岳地帯に接続するところから、この尖頭器に代表する石器の文化を但馬に持ち込んだ人は、西部日本よりやつてきた人ではなく、東部日本から移ってきた人だろうと推定されている。

日高町の町域では、まだ、この尖頭器が発見されていない。しかし、この日高町にはいつかの日、この尖頭器が検出される可能性が、但馬の他の地域に比べて濃厚な地帯のように思われてならない。大空に断続的に吹き上げる神鍋の噴煙を見上げ、炸裂する轟音におののいた人たちの掌に、しつかりとこの尖頭器が握られていた姿を

見てとる日があるよう思えてならない。それというのも、日高町、わけても清滝地区の神鍋山麓一帯には、但馬でも、最も古い遺跡の一つと考えていいものが存在しているからだ。

縄文式土器時代の区分

やがて、神鍋の噴煙が鎮静化したころ、黒褐色の灰土の上に現われた人たちは、既に土器を作り、これを日常用品として利用することを知っていた。このころの土器の表面には、縄目様の文様が特徴的であるために、縄文式土器と呼ばれ、この時代を縄文式土器文化の時代と呼び、一般に早期・前期・中期・後期・晚期の五つに分類されていたが、最近では、学問が精緻化してきて、西日本の縄文式土器の中で、もっとも古いと考えられていた押型文土器より更に古い時期に属する隆帶文土器・細隆文土器・爪型文土器の文化があつたことが明らかになり、早期縄文文化の前に更に草創期縄文という一時期の設定が提唱されている。

さて、兵庫県では、縄文遺跡は、その殆んど大部分が但馬に集中している。その特長的なことは、時代が遡るほど、その遺跡は高地部に多いことだ。兵庫県下で最古の遺物が検出された閔宮町の別宮遺跡は、海拔六・七百メートルの高原地帯で、ここから草創期縄文文化のものと見ていい爪型文土器を混じえながら、早期縄文式土器の中でも、古い時期のものが多量に出土している。別宮遺跡は、鉢伏山の尾根が南にのびた丘陵の上に展開している。これと同じような景観を呈しているのが、日高町の神鍋遺跡だ。

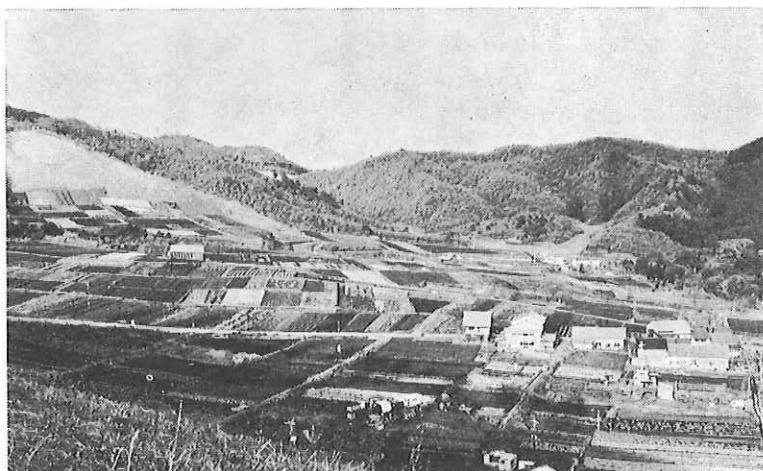


写真22 神鍋遺跡遠望（神鍋山より）

日高町の早期繩文遺跡

神鍋遺跡は、清滝地区の神鍋字
笹尾・上野にある。神鍋山の裾
野の標高三百三十メートルと三百六十メートルの緩斜面の
南面部に、土器片・石器等が散布する地点が約十二ヵ所ほ
ど集中している。これらを総称して神鍋遺跡と呼んでいる

が、戦後、この地に酪農事業をとり入れようとして、開墾
が進められる途上に、繩文遺物の散布地であることが発見
され、地元の篤学の人たちの手で入念に遺物の表面採集が
行われていた。本格的な発掘調査が行われたのは、昭和四
十四年（一九六九）の晩秋のことだった。調査は、神鍋遺
跡の一部について行われた。その結果、遺跡地は、一層表
土・二層包含層・三層ローム層・四層スコリヤ層の順に構
成されていることが分り、遺構として、住居跡・貯蔵穴・
配石遺構等を検出した。貯蔵穴は、中から発見された土器
の様式から、繩文式文化前期後半のものと考えられ、その
当時の食料貯蔵の一方方法を示すものとして興味をひいた。
この中には、炭化したカヤの実が入っていた。配石遺構

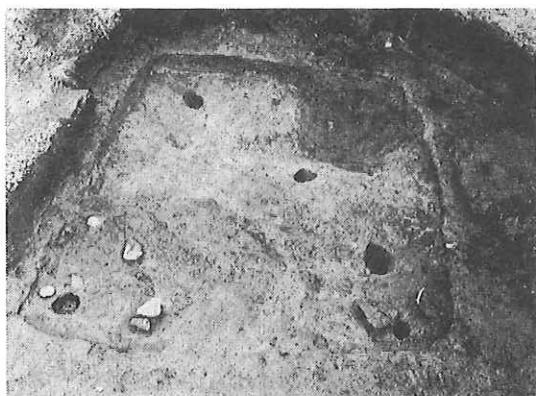


写真23 神鍋遺跡の住居跡

は、発掘調査前にも、かなりの数のものがあつたらしいが、なお、おびただしい数の遺構が検出され、河原石が多く使用され、赤く焼けているもの多かつた。恐らく、この石で動植物をむし焼きにしていたものだろう。出土遺物は、縄文式土器を中心に、石器類がこれに伴なつていた。土器片千点、石器類百点というのが発掘の成果だった。

さて、この発掘出土遺物にかぎらず、既出土の遺物を含めて、神鍋遺跡の出土遺物を整理して見ると、少數の爪型文土器の外に押型文土器の出土が知られる。ここに押型文土器が検出されたことは、注目しなければならない。この押型文というのは、形を整えて仕上った土器がまだ半乾きで、柔かい時期に彫刻を刻み込んだ細い棒を、土器面にぐるぐると、ころがし廻して押しつけられた文様をもつた土器のことである。施文には山形文・格子目文・楕円文などがある。つい最近までは、縄文土器の中でも最古の文様と考えられ、早期縄文土器の標準遺物とされていたものだ。この押型文土器が出土していることは、つまり、神鍋遺跡が非常に古いもので早期縄文時代の遺跡であったことを示している。更に詳しく述べると、神鍋遺跡出土の押型文土器の施文は、山形文・刺突文・格子目文・楕円文など、各種多種を示している。そして神鍋遺跡では、これらの、とりどりの文様をもつ押型文土器が、層序をなして出土しな

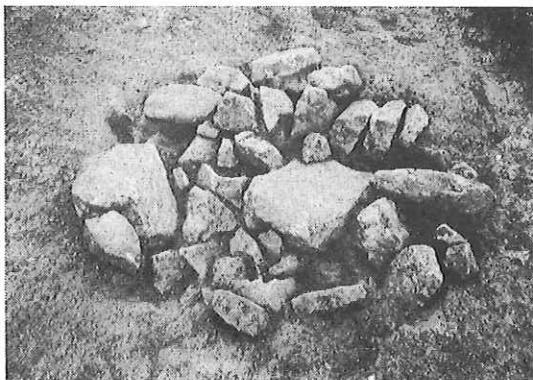


写真24 神鍋遺跡の配石遺構

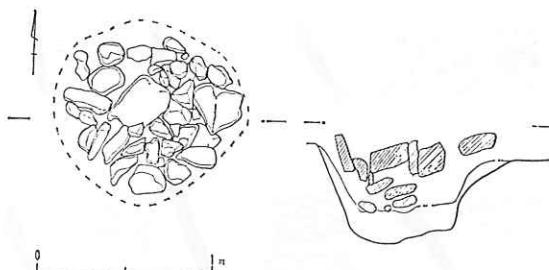


図13 神鍋遺跡の配石遺構実測図

いで、長い間に地表に露出したようになっているので、どれが古くて、どれが新しいかという編年の問題がからんでいる。そのためには、但馬の各地に点在する押型文土器を出土する遺跡の研究をはじめて、全国に散在する押型文土器出土の遺跡とを対比して考える必要がある。但馬の縄文式土器の編年試みは、まだ緒についたところだが、その成果に立って見ると、日本の他地の例と同じように、爪型文や刺突文に似た押型文が、最も古く、山形文・格子目文がこれに続き、橿円文は、後になるようであるから、神鍋遺跡の性格は、縄文時代の中でも早期に属する遺跡ではあるが、早期の中でも、いくつかの時期的な段階がある複合遺跡でもあった。更に「爪型文土器」も出土していることから、ひょっとすると、縄文草創期の時代にくり上がる可能性のある遺跡で、別宮遺跡につぐような古さを持つ貴重な遺跡と見ていいだろう。

さて、神鍋遺跡は、段階的な複合

いで、長い間に地表に露出したようになっているので、どれが古くて、どれが新しいかという編年の問題がからんでいる。そのためには、但馬の各地に点在する押型文土器を出土する遺跡の研究をはじめて、全国に散在する押型文土器出土の遺跡とを対比して考える必要がある。但馬の縄文式土器の編年試みは、まだ緒についたところだが、その成果に立って見ると、日本の他地の例と同じように、爪型文や刺突文に似た押型文が、最も古く、山形文・格子目文がこれに続き、橿円文は、後になるようであるから、神鍋遺跡の性格は、縄文時代の中でも早期に属する遺跡ではあるが、早期の中でも、いくつかの時期的な段階がある複合遺跡でもあった。更に「爪型文土器」も出土していることから、ひょっとすると、縄文草創期の時代にくり上がる可能性のある遺跡で、別宮遺跡につぐような古さを持つ貴重な遺跡と見ていいだろう。

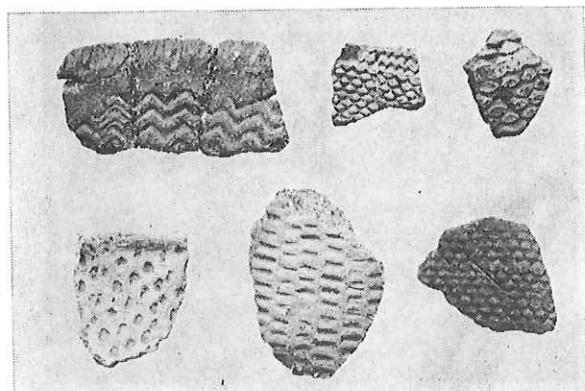


写真25 神鍋遺跡出土早期縄文土器

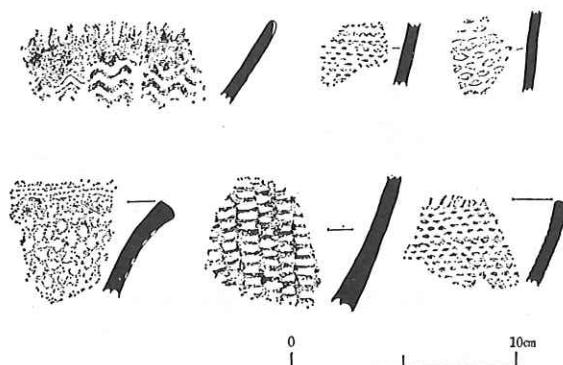


図14 神鍋遺跡出土早期縄文土器拓本

の土地へと漂泊している。やがてまた違った集団がやってきて、神鍋山麓の別の地点に生活を展開するが、これも、やがて何時ではなく、次の地点に出向いていることを示している。つまり、神鍋遺跡十二地点は、それぞれが単一遺跡だということだ。单一遺跡というのは、神鍋の十二地点だけがそうだというのではなく、但馬の縄文遺跡の九割までが、单一遺跡だ。だが神鍋遺跡は、このそれぞれの单一遺跡を地域的に十二ヵ所

遺跡であるとはいえ、これを詳細に見ると、ある小区画の中に、いくつかの時期の土器が混在しているのではなくて、小区画ごとに、各時期の土器が分れて遺存しているのである。つまり、神鍋遺跡が十二地点に分れていることは、神鍋山麓の一地に永く定住した生活が営まれたのではなく、一地に生活が展開しても、それは短期間で、やがて他



図15 神鍋遺跡と山宮遺跡位置図

も包括しているので、遺跡全体として見れば、継続性が見られるものだ。

このように、兵庫県下でも、最古のものと考えられる関宮町の別宮遺跡や、それに近い時期の神鍋遺跡が、但馬の山岳地帯の高原状地形の土地に展開していることは、日本の各地の押型文土器の文様の類似性などを考え合せて見ると、先土器時代に引き続いて、東日本の中部山岳地帯との連絡が見られる外、新しい西日本の中部山地との接触が認められている。山の尾根筋を主な踏み分け路として、稜線沿いに生活を展開し、獲物を求め

て、時には東からまた西から移動して来たことだろう。また、円山川やその支流の水系も、連絡路として利用されていたものではなかろうか。その時、神鍋遺跡の形成には、円山川の支流稻葉川水系が、特に重要な役割を果したことだろう。神鍋遺跡に接近して、山宮遺跡がある。神鍋遺跡から直線距離にして、二キロメートル、ブリ山の東南に面する台地上の標高三百メートルの地点だ。やはり早期繩文・前期繩文・後期繩文の土器が出土している。この山宮遺跡は、神鍋遺跡の延長はあるが、稻葉川水系とも、また深くかかわっているものようだ。

また、神鍋の溶岩流によって作られた堰止湖に關係しているのが、前田遺跡だ。山宮と頃垣の両境附近の台地の上にある。三方に川をめぐらしているが、この台地は、神鍋の中央溶岩流によって作られたものだつた。石井・山宮平野は、もともと堰止湖が干上つたものだから、前田遺跡は、この堰止湖に關係したものだろう。早期繩文の山型文土器や石鏸・打製石器が出土している。

また、神鍋遺跡の背後にある竹野川水系の存在も忘れてはならない。神鍋遺跡の東方延長地点は、竹野川本流の源流部である。現在のところ、竹野川水系の考古学的所見については、全く知られていないが、やがては、竹野川と神鍋遺跡との関連が確認されることもあるう。

このように、わが日高町の高原には既に早期繩文時代のころ、西は中国山地からの影響と共に、東は中部山岳地帯の要素も、濃厚にからんでいたのである。特に東方との接触が、この早期繩文の時代にも見られるというのは、先に無土器文化の時代の尖頭器の文化の伝播のあり方に相応じるものだつたろう。

このように、神鍋山周辺の地帯は、但馬の中でも、いち早く人々が住みついた地帯であつて、噴煙の収ま

つた神鍋の火山灰地に営まれた生活には、北陸や中部山岳地方との関連が濃厚に含まれると共に、西方地域の要素も混入していた。この山岳地は、亜温帯のブナ林を主体とした、いわゆる落葉広葉樹林帯の文化圏に属していて、クリ・ドングリなどの堅果性植物や、この堅果を食べにくる動物たちが、彼らの重要な食料資源だった。また、神鍋溶岩流がせき止めて作った堰止湖にも漁していたことだろう。

前期繩文遺跡

早期繩文時代につづくのが、前期繩文時代だ。この前期繩文時代のうち、その前半の時期において、兵庫県の場合、三つの著しい特長が見られる。その一是、北九州方面からの影響だ。その二是、纖維を混じた厚手の土器が存在することだ。この厚手土器は、北陸以北の土器群と著しい類似性をもつものだ。その三是、表日本の瀬戸内海的な要素がくっきりと鮮かに現われていることである。三つの傾向の中で、主流をなすのは、瀬戸内海的な要素で近畿の中でも兵庫県以西の地域が一つの文化圏を形成していることを示している。日高町の場合第一の西方的な要素をもつた土器は、現在のところ、まだ検出されていない。これに対して、第二の厚手土器は、神鍋遺跡や平野部の水上遺跡から出土している。また、第三の瀬戸内の影響を受けた土器も、神鍋遺跡と水上遺跡から検出されていて、北陸風厚手土器と共に存していることが多い。

こうして見ると、前期繩文文化の前半期になると、日高の地域では、西方的な要素が姿を隠し、東方的な要素も微弱化し、代って南方からの影響が大きく浮び上ってきている。
ところが、前期繩文文化の時期の中葉期や後半期に入ると、地域的に特長をもつた土器が生産されてく

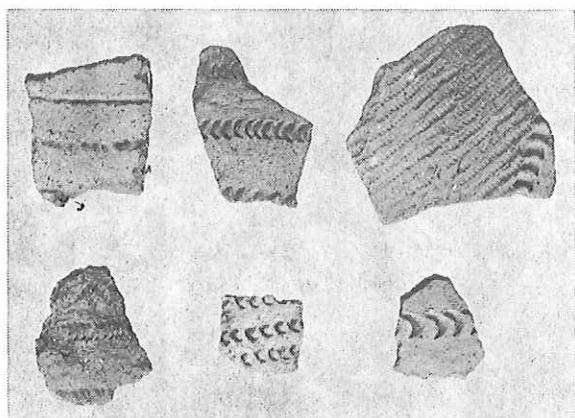


写真26 神鍋遺跡出土前期繩文土器

る。その好例は、中葉期では、近畿地方一帯にわたって、東方的な要素に瀬戸内的な要素とが噛みあつてできた磯の森式土器といわれるものがそれだし、後半期では、土器の縄文に突帯が附せられ、この突帯には、刻み目や刺突を入れる技法の加わった土器が出現していることだ。この突帯を持つ前期後半の縄文土器に、更に地方色が加わると、但馬では、村岡町の兎和野原遺跡の土器に代表される兎和野原式土器と命名されるものになる。

神鍋遺跡は、また、この前期中葉期・後半期の縄文遺跡でもあって、磯の森式土器が出土していることは勿論、兎和野原式土器に似かよつたものも出土していて、蘇武岳の尾根越しに矢田川水系、わけてもその支流、湯舟川水系との連絡が濃厚に考えられる。

こうして見ると、神鍋遺跡は、早期縄文時代に深いかかわりを持ち、日本の東方地域や西方地帯、更には南方の瀬戸内との文化交流の様相を、濃厚な内容とする貴重な遺跡だったことが知られよう。

中期縄文文化の遺跡

前期縄文に続くのが、中期縄文だ。公式的な言い方をすれば、この中期が縄文時代の最盛期で、遺跡の数は、前期と比較にならぬ程増加し、山岳地帯より低地へと移動の傾向を示す一方、土器そのものも爛熟した型状を示し誇張化された手法が加わってくる。ところが、但馬でも、この全国傾向に応じる如く、山岳部の遺跡は殆んど消滅してしまうが、それかといって、低平地に数多くの遺跡が検出されるかといえば、そうでない。ちぐはぐな現象が見られる。言うなれば、但馬では中期縄文遺跡は、殆んどないと言つてよい状態だ。ましてや、縄の目の文様が極端に装飾化し、豪放な図柄を伴なつた特長的な土器は、何一つとして出土していない。

この数少ない但馬の中期縄文の遺跡の一つが、やはり神鍋遺跡だ。少量の船元式土器や里木Ⅱ式土器を出土している。船元式土器は、岡山県倉敷市の船元貝塚の土器を標式とするもので、中期縄文の中でも、前半期のものとされているものだし、里木式土器は、岡山県船穂町の里木貝塚の土器を標式とするもので、中期縄文の後半期のものだ。この期になると東方的な要素が消えて、却つて中国山地の縄文文化圏に包摂されるいる。これは但馬の高原地帯の遺跡についても同じるものだった。こうして見ると、神鍋遺跡は、早期・前期と続き、微ながら中期を含む綜合遺跡だったといえよう。但馬の山岳地帯で検出されるこれまでの多くの縄文遺跡は、どちらかと言えば、比較的に単一な出土遺物を持つ遺跡ばかりだった。そこでは縄文人の生活が展開されてはいたが、その期間は永くは続かず、次の適地を求めて移動している。これに対しても、神鍋遺跡では、但馬のどの地点より永く縄文人が訪れ来てはやがて去り、また暫くしては別の集団が住みついていた。息長く次から次々と新しい生活が生まれてはいたが、この中期縄文時代の遺跡が少ないとさす

がにこの時期の生活の主体が、平野部に移って行く景況に応じるもので、むしろこの時期、神鍋山麓に生活を繰り広げた人々は、迷い鳥が、しばし翼を休めた形にも似て、入り込んで来た人だったかも知れない。そして、このようにこの後も思い出したような形で、縄文人の生活がいくたびか引きつがれていく。

縄文大海進

さて、中期縄文時代になると、但馬では、その遺跡の数が、極端に減少し、わが神鍋遺跡においても、この期の土器片の出土量が少くなっているということは、そこに展開された縄文人の生活が濃密ではなくなつたからだ。つまり、前代の早期・前期の時期に比べて人口が過疎化して来ている。

さて、今から一万年前くらいの頃から、ちょうど草創期縄文の頃から、気温がわずかづつながら、温暖化してくると氷床の融解を促進し、海水面が上昇してくる。この海進現象の最極の時期は、いまから約六千年前で、ちょうどこの中期縄文時代の頃に当り、今までの海岸線の低平部が水びたしになる。この現象は、縄文大海進と呼ばれている。納屋で海拔七メートル、鶴岡で海拔十五メートル、赤崎で海拔十八メートルといふから、試みに海面が十メートルも上昇すれば、国府平野以北は水びたしだ。更に二十メートルも上昇してくれば、久斗の附近まで水は入り込んでくるし、赤崎・浅倉間は、完全に水面下だ。気候が暖かくなつて、海の水があふれこのように陸地の低平部を水びたしにしているので、早期や前期の縄文時代の人々は、低的な所で生活を営むよりは、但馬の高原部や山地で獲物を追う生活が展開していたし、また、高所地帯といつても、気温が高いのだから、現在の我々が想像するほど寒冷・積雪地帯ではなく、比較的越冬の条件は厳し

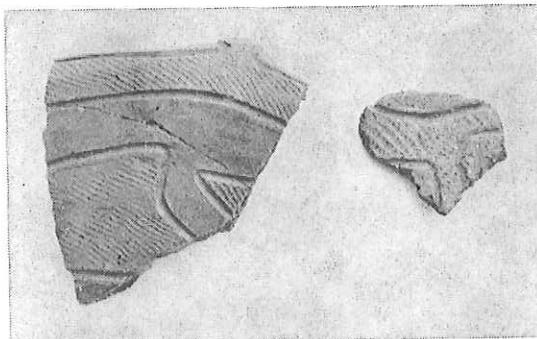


写真27 神鍋遺跡出土磨消縄文土器

くなかつたろう。かくて、この高所・高原・山岳地帯に、縄文時代の古い頃の生活が営まれていた。そのうち、暖かくなりつつあつた気温が、やがてまた、ゆるやかに低下していく。二千年前ぐらいが、その寒冷化の一つの頂点だった。寒地の氷は厚さをまし、海面が低下していく。

弥生海退と呼ばれる時期がそれだ。

そうなると、山岳地帯の植物相も変化し、温暖気候に適応していたカシ・シイなどの樹林が、ミズナラ・ブナなどで代表さ

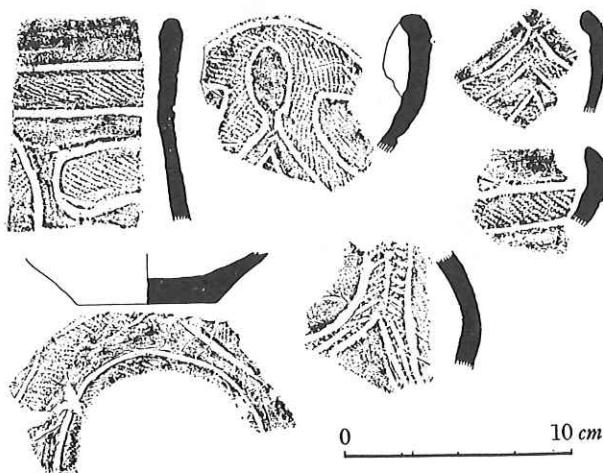


図16 山宮遺跡出土縄文土器拓本（兵庫県埋蔵文化財調査集報第2集より）

れる亜温帯落葉樹林に変化しだす。いままでカシやシイなどの木の実の生活にたよっていた縄文人の食生活に変化をしることになった。寒冷化に伴なう生活難から、山岳を離れて、低地へ、また、北から南

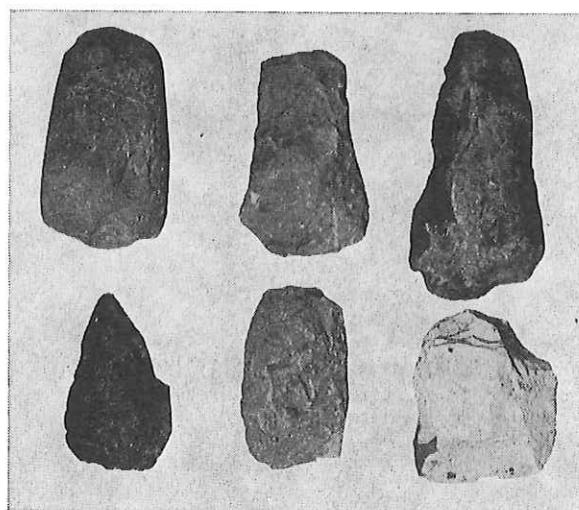


写真28 森山出土石器類

えど、住民の移動を促したことであろう。加えて、また、この頃神鍋山も火山活動を盛り返してきたことだつたろうか。火山灰を降らすことでも、しばしばだつたろう。生活環境が悪化してくる。神鍋の山麓に、永い間にわたって繰りひろげられていた生活にも、過疎化の波が押し寄せているわけだ。中期縄文の土器片の出土が少ないので、こうしたわけからだつた。

後期・晩期縄文の遺跡

神鍋遺跡では、中期縄文文化の痕跡が目立つて少なくなってきてているとはいえる。磨消縄文土器が採集されているのは、注目しなければならない。磨消しというのは、土器の表面に縄文を施し、竹べらなどで沈線を描いて区割を施し、区割に応じて縄文をすり消していく手法で、この手法は、縄文時代の全期にわたって採用されているが、この手法が盛んに使用されたのが、後期から晩期にかけての時代だった。神鍋遺跡から発見される磨消縄文は、まさに、この後期縄文時代のものであつて、ここからはまた、晩期後半の土器片も採集されている。また、昭和四十九年、三方地区の森山地域で、ほ場整備事業を実施したところ、約五十点の石

器、若干の土器片が検出された。これらは通じて、縄文時代晩期のものを主体として、その一部は弥生時代及びそれにつづく時代のものであった。

かくて、日高町の高地部においては、後期ないしは、晩期の縄文時代の文化も、細々ながら、展開していることが知られる。

祢布ヶ森の三つの遺跡

他面、日高町では、江原駅から神鍋へ行く、旧街道筋東構地区の北側に「祢布ヶ森」という小字がある。今、蚕業試験場が設置されているが、この構内を昭和二十七年発掘したところ、縄文後期や晩期前半及び後半の凸帶文土器と考えられる土器が出土しているし、日高地区の宵田小字焼ヶ辻の、焼ヶ辻遺跡や、水上の水上遺跡では、晩期の土器片が採集されている。また、昭和四十八年蚕業試験場隣の東方部を発掘したところ、試験場東約五十メートルの所で南西から北東に向う、幅約一メートル、深さ六十センチの溝が検出され、ここには、古墳時代前期前半の土器を多量に含んでおり、また、稻葉川旧河道に該当する地点では縄文期の土器とともに十数点の石器が検出されたことから、蚕業試験場東方五十メートルのこの溝を境にして、遺跡の性格が実にはつきりと相変つていていることが判明した。また、あとでもふれる如く、蚕業試験場の西側一帯は、また奈良時代から平安初期時代にわたる遺物の出土地点もある。蚕業試験場内の遺跡とも異った様相を示しているから、この祢布ヶ森地域全体は、三つの文化相の差異が見られるところだ。それで次頁に見る如く、中心部の蚕業試験場構内の縄文後期の出土地は、従来のように、祢布ヶ森遺跡とよび、試験場の東の溝より東方地区は祢布ヶ森東遺跡、試験場より西の

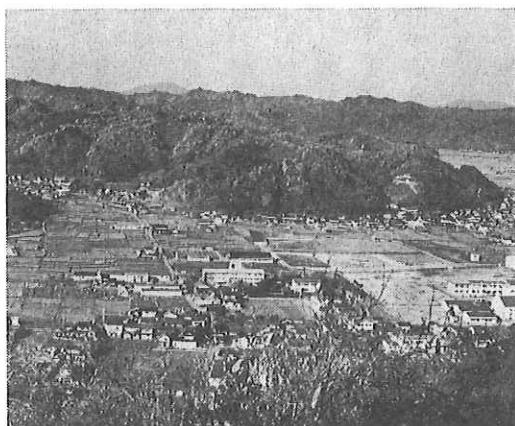


写真29 称布ヶ森遺跡付近遠望

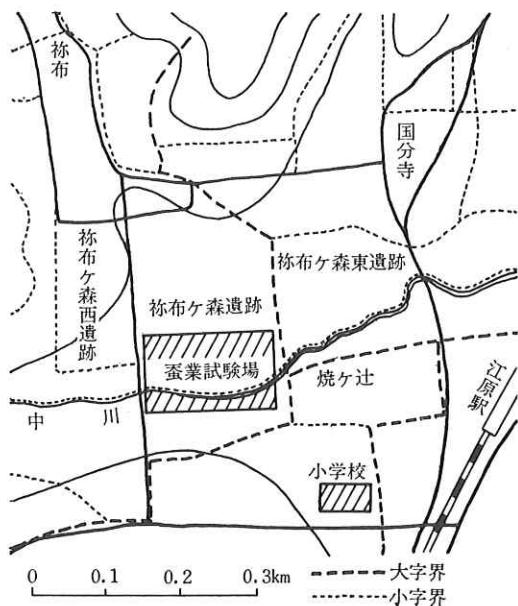


図17 称布ヶ森遺跡付近図

地区を称布ヶ森西遺跡と呼べば、それぞれの性格をはっきりと浮き立たせることができた。そして、この称布ヶ森東遺跡の南方は少し低くなっている。この三つの遺跡は、通じて、低湿部にあり、このうち、比較的接近している称布ヶ森遺跡と焼ヶ辻遺跡から、早期・前期・中期の縄文遺物が出土していることから見て、後期になつて初めて人々が住みついた遺跡だった。

このように、高地の神鍋山麓だけでなく、低平部の稻葉川と円山川との合流点附近の扇状地帯に縄文時代

の新しい生活が展開してきている。それは、後期繩文から晩期繩文にかけての人たちは、山岳地帯から、山裾などの平坦地や低平地に移動していることを示している。そして、この低平地というのは、山を削った土砂が堆積してきた土地であると同時に、気候がそろそろと寒冷化ってきて、海水面が下降してきたために陸化してきた地域でもあつた。

サケ・マスと縄文人

さて、ごく近年まで、円山川ではサケ・マスが産卵のため溯上していた。円山川の支流稻葉川でも、日高地区の道場附近でサケ・マスの漁獲が行われていたという。サケ・マスが川をさかのぼる日本海岸側の西限は、この但馬地方から、因幡にかけての地域だった。群をして川を溯上するサケ・マスは簡単に捕獲できるので、通じてこのサケ・マス漁獲可能地帯は、海の幸に恵まれ、豊かな生活が展開し、極度に発達した晩期縄文文化地帯が形成されたと考えられている。ところが、弥布ヶ森遺跡や焼ヶ辻遺跡や水上遺跡などの後期・晩期の縄文遺跡からは、このような爛熟した土器は検出されていない。案外この但馬では、生活のゆとりというもののがなかったのかも知れない。何にもまして注目すべきは、これらの遺跡が低湿地に存在するということと、縄文時代の遺物に混じて次の時代に当る弥生時代の土器や土師器が出土しているということだ。これは、山岳地帯の漂泊にも似た生活が、打ち捨てられ、一挙に低平地の生活が展開し、しかも、それが持続的であることを示している。彼らが生活をする上において、これらの地が非常に望ましい地点であった証左だ。低地への移行ということの背後には、実に大きな社会的な移りかわりが伴なつていた。新しい文化が、この日高の町に定着しようとしている。

第二節 稲づくりの文化

弥生文化の波

縄文式土器文化に代ったこの新しい文化は、弥生式土器文化といわれるものだつた。西暦紀元零年を中心に前後約五百年にわたつて展開した文化で、最初の百五十年を前期、次の

二百五十年を中期、終りの百年を後期と分類している。土器は、赤褐色の素焼きを基調としたもので、最初の発生地は、北九州だつた。やがて、短日時の間に近畿地方に広がつてきた。この弥生文化というのは、基本的に農業生産を母胎とする文化であつた。縄文式文化の時代の終り頃から、キビ・アワ・イモ類の栽培が行われていたらしい。この限り縄文人にとって一番邪魔になるのが湿地帯であつた。だが米作りの文化が知られると、湿地帯こそ、米作りのための最良の場所に転化する。

但馬にどのように、米作りの技術が伝播したかといえば、そのごく初期の時期、つまり前期弥生時代の前半ごろに、北九州から日本海岸沿いに北上したものだらうと推定されている。と、いうものの、この前期弥生時代の前半期の遺跡や土器が、何一つとして、この但馬から発見されていない。だが、但馬の近くの京都府函石や、鳥取県の目久美から、北九州の前期弥生式土器が発見されているという状況証拠があるし、また、「クミ」とい、「メグミ」ともいうように、「クミ」という言葉は、「クメ」に通じ、民俗学の解釈では、米作りに関係した場所と見ていく。但馬では、「イグミー居組」という地名があり、また、「ミグミー美含」という郡名も、かつてはあつた。考古学の上では、但馬の日本海沿いでは、この北九州の前期弥生式の

土器が出土する公算は大きいと見られている。

祢布ヶ森遺跡

何といつても、前期弥生時代の前半期の遺跡は、但馬では、目下のところ検出されていないし、その後半期の遺跡も至って僅かで、出石町・浜坂町・和田山町に存在しているだけだ。日高町では、まだ確認されていない。それにしても、但馬の内陸部に弥生文化が見い出されることは、米作りの技術が海岸部だけでなく、但馬の内部にも浸透したことを示している。だが、浜坂町出土の土器片は、瀬戸内海側に特長的な土器と似かよっているため、これがどのような経路をたどって影響を受けたのか、想像さえもできないものだというし、和田山町の遺跡についても、その文化が、日本海側からか、あるいは、播磨平野側からか、いずれの地から入り込んだものか不明という現状だ。

さて、前期弥生文化の時代を通じて、日本海岸沿いに農耕文化の展開の公算が大きく、且つまた、円山川水系の最奥部の和田山に於て農耕文化の痕跡が見られるのだから、その中間点に当るこの日高町の町域において、やがて農耕文化の展開が見られるようになるのは当然だ。

かくして、中期弥生時代の遺跡として、日高町では、祢布ヶ森遺跡が現れてくる。この遺跡は、表土の下が粘土層・砂礫層、粘土層・泥土層・粘土層・砂層・砂礫層という層序をなしている。絶えず、稻葉川の洪水を受けた様相を示している。包含遺物が豊富な層は、地表下一・八メートル前後のところで、ウリ・ヒヨウタン・胡桃くるみ・モモの種子や、鹿の骨・魚骨片が出た。木器類の出土も数多く、その中には、鍬の破片や発火具があった。発火具である火鑽臼は、穿孔部でへし折れているため、原型は不明だが、残った部分にも発

火孔が存し、黒く焦げ炭化していた。また、土器片も検出され、中には、末期弥生式土器の様相を呈するものもあった。

この中期弥生時代の遺跡も、但馬ではその数が多くない。その数少ない遺跡の一つが、この祢布ヶ森遺跡であって、稻葉川の洪水原に形成されていた。遺物の包含層が地下一メートルから二メートルぐらいのことろであったから、これは、その後二千年の間にいくたびか稻葉川が氾濫し、土砂が堆積した結果を示している。中期弥生の生活が展開していたのは、現在より更に低平な湿潤地であった。この祢布ヶ森遺跡から穀の圧痕のある土器が出土している。これこそ日高町の湿地帯において米作りが営まれていたことを示すなりの証拠だ。祢布ヶ森遺跡は、すでにふれた如く、繩文晩期の遺跡を形成していたが、今や弥生時代の遺跡としても現われている。

加えて、シカの骨や魚骨が出土し、堅果類も出土している。米作りを行いつつもなお、動物性食糧に依存したり、植物を採集して、食糧源にあてている。

瀬戸内の文化と但馬

弥生時代に入ると、青銅器や鉄器などの利器が使用され、石器は姿を減少していく。祢布ヶ森遺跡の出土品の中には、石器は一個も出土しなかったのは、この傾向に応じるものだろう。青銅器の代表である銅鐸が、この日高の地から約二十キロメートルほど離れた円山川の河口附近の豊岡市氣比の地から発見されているが、祢布ヶ森遺跡からは、それかといって青銅器や鉄器が出土したわけのものでもなかった。

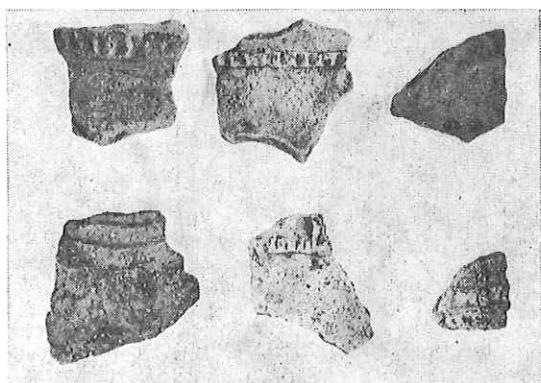


写真30　祢布ヶ森東遺跡出土弥生後期土器

さて、弥生時代も後期に入ると、但馬の弥生式土器、わけてもその後期の前半のものが、摂津を中心とする土器群と類似しているという。このことは、大阪湾沿岸地方の影響が強く但馬に及んでいる証左かも知れない。瀬戸内海系の土器が但馬に伝来すると考えられる一つの通路は、加古川水系だ。最上流部は、丹波の水上盆地で、ここが、瀬戸内へ注ぐ加古川と日本海へ注ぐ由良川の分水嶺となっている。その標高はわずか二百メートル、日本一低い分水嶺だ。但馬へ浸透しようとする瀬戸内系文化にとつて恰好の伝播路だった。かくして、後期弥生時代になると、特にその後半期の但馬の土器というものには、地域的特色などは全く見られなくなってしまい、瀬戸内系の文化でぬりつぶされてしまう。但馬は、畿内圏のわくに包摂されてきた。

さて、米作りが行われたということは、限られた自然物を食糧として採集する段階から、人間が自然に働きかけ、計画的に食糧を生産する段階に入ったことだ。米作りのために、定住化が促進されると、ムラができる。ムラとは、ムレ一群一から発した言葉だという。米作りには、何といっても共同作業が必要であったから、ますます集団生活は発達するし、共同で労働するから、集団で消費する量よりも多い生産が可能となる。農産物の蓄積が可能になる一方、ムラの中に貧富の差が生じ、やがて身分の差へと転化する。ムラを統

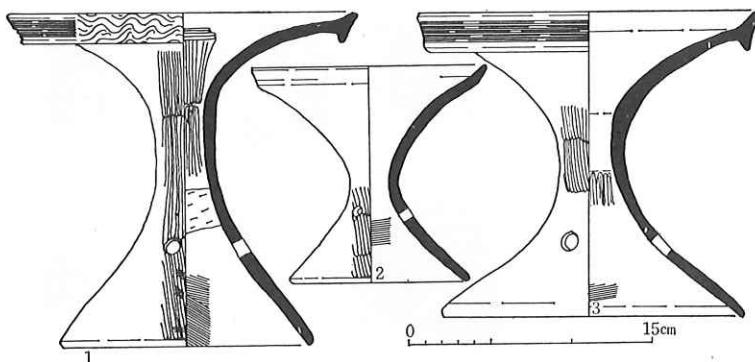


図18 称布ケ森東遺跡出土高杯実測図

率する首長が現われる。この過程において、ムラとムラの統合が進み、この集落連合を統率する上位者が現われる。それは、一つの水系を単位とする地域の支配者であることが多かった。米作りの技術は、このような社会的な変革をひき起し始めた。時代は弥生文化の時代から次の時代へと展開する。

第三節 古墳時代の日高

水上遺跡 弥生時代が発展的に解消したあとに、古墳時代が続く。

その時期は、三世紀末ないし四世紀の初めから七世紀までの約三百年で、四世紀代を前期、五世紀代を中期、六世紀以降を後期と分類する。

日高町の地域のこの古墳時代の遺跡は、約七百を数えるが、その中で比較的永い時期にわたるのが、日高地区の水上遺跡だ。水上遺跡は、称布ケ森遺跡から東北へ一キロ半の地点にある。西及び北に、円い丘陵がま近く迫り、東及び南は開けて、低湿平野部となっている。こうした低平地にもかかわらず、既に、前期縄文時代の前半期の土器

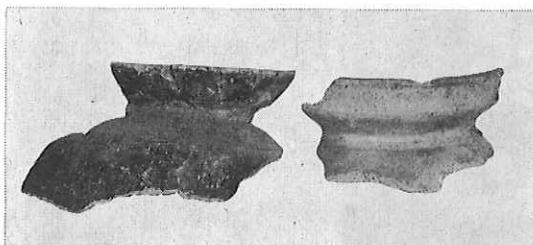


写真31 水上遺跡出土布留式並行土器

が出土しているほか、石鎌や石斧、そして若干の黒曜石片も見い出されている。縄文時代のはじまりの時期に高い山岳部の人たちが時にはこの地までやって来ていた。恐らくその道には尾根が選ばれていたことだろう。さて、日高町立日高東中学校の新築用地が国分尼寺跡に喰い込むかも知れないとの学術的な考慮から、この水上遺跡を発掘したところ、数多くの建築用材・木製下駄・突型土器等多数の遺物が出土し、四世紀の前期古墳時代から、九世紀の平安時代初期にわたる息の長い遺跡であることが判明した。

この古墳時代になると出土する土器も、土師器はじきと呼ばれるものに変つくる。弥生式土器の系統をひく素焼のもので、普通黄褐色をしている。陶土を水にとかし、その粘土質の精粗を分けた粘土を原料として作つたものだ。土師器の最古のものは、庄内式と呼ぶもので、大阪府の庄内遺跡出土のものを標準式としている。水上遺跡出土の土器の中には、この様式に類似しているものも一部あつたが、主体は、次の段階で畿内中心に広く流行した布留式土器に属している。この土器は、奈良県天理市の布留川畔から出土した一体の土器を標準式とするもので、四世紀の土器と考えられているものだ。水上遺跡出土の布留式土器並行期と思われるものには、壺は殆んどなく、カメと高杯たかつきばかりだった。水上遺跡の特長は、この布留式土器並行期と思われる木器や建築用材が多量に出土したことだ。湿地帯遺跡であつたため、木質のものが腐らずに保存され、良好な出土状態だった。この出土の建築用材を詳細に調べてみると、住居用のもの



写真32 水上遺跡発掘状況

ではなくて、倉庫用のものだった。しかも、九本の柱を持った高床倉庫だつた。床が地面から高く持ち上げられているので、収穫した穀物をネズミの害から守つたり、湿気を防ぐためには、都合のよいものだつた。高床倉庫の存在は、弥生時代のものは既に知られているが、この四世紀頃のものはいまだ見つかっていないかった。つまり、前期古墳の時代の高床倉庫としては、日本最初の発見例であつた。

また、出土のこの木質材料を詳細に見ると、壊れ方が腐食による自然崩壊ではなくて、何か強烈な外部からの物理的圧力が加わつた結果のようだつた。山抜けによつて土砂が流れ落ちて、押し潰したものようだ。

かく、水上遺跡は、称布ヶ森の弥生時代の農耕遺跡に続く古墳時代前期の農耕遺跡として現われ、農産物の余剰分を貯える倉庫を建設するまでに至つているが、この時、この水上の地で農耕に従事していた人たちの遺跡、即ち、古墳は、この地ではまだ発見されていない。古墳は、墳墓のこととで、今の世になつては、そこに眠る人の名前は全く忘れ去られ、誰とて祀る人もない墓のことだ。死人を埋葬するための墓は、既に古くより當まれていたが、この古墳時

代と呼ばれる時期の墓は、外形的には、土を盛り上げた墳丘として現われてきて、その形状も、ほぼ全国的に画一化してきている。

但馬の最も古い古墳の一つと考えられるのが、豊岡市森尾古墳で、四世紀中頃のものと考えられている。水上に高床倉庫が建ち並んでいた直後の時期のものだ。また、この水上遺跡の北東部、豊岡市納屋は、もともとは、国府村の村域であった地だ。ここの中ノホーキ塚は、全く破壊されてしまつて全容を知るよしもないが、全長三十メートル程の前方後円墳であつたらしい。前方後円墳というのは、古墳時代の墳墓の一形式で、円墳の方丘が連携し、平面形が鍵穴のようになつたものである。首長墓の典型的な様式をなすものだ。ホーキ塚では、この前方後円墳の墳丘部より、弥生時代の墳墓が発見されたと伝えている。

このホーキ塚から北へかけて、山並みが続く中にも、豊岡市妙楽寺山の尾根からは、木棺直葬墓といつて、表土をそのまま掘り下げて、木組の木棺を葬った形の墓群が検出されている。古い墳墓でなににしろ、古墳時代に入る直前の墳墓かとも考究されているだけに、古墳発生期前の集団墓の可能性も考えられ、森尾古墳に負けないくらいの古さの古墳であった筈だし、むしろ、水上の地に高床倉庫が築かれる直前のものだつたかも知れない。こうして見ると、納屋のホーキ塚と、妙楽寺の初期集団墓とは地域的に近接していることが同時に、それがまた時代的にも継続があることのように見える。水上の地に古墳時代前期の農耕遺跡が現われるのもこのような先容に応じるものだつた。そうすると、水上だけではなく、同じような地理的条件にある国府地区の上石・芝・納屋にわたる山麓地域でも、やがて米作りを展開させていったことだつたろう。

この森尾古墳にしても、ホーキ塚にしても、丘陵上に設けられた古墳で、眼下に平野が広がっている。特に納屋のホーキ塚は、足下に円山川の水流が総々と流れている。新たに展開した農耕社会において、水の重要性は最大のものだった。ホーキ塚は、円山川水系下流部を掌握した王者の墓だったかも知れない。このようない古墳初期の時代の古墳は、日高町の町域では、まだ発見されていないが、それが日高の町域とごく至近距離の所にあり、それも、もともとは氣多郡の郡域内であつたということは、注目されねばならない。

山本の羽根山古墳

さて、今でこそ八代川は、竹貫・上石の部落を通つて北流しているが、かつては、八代谷の開口部、藤井あたりから、一気に南流していたような時期もあつたのではないか。稻葉川とても同様だ。岩中あたりまで南下しないで、祢布川と合流して鶴岡方面に東流したこともあるだろう。このような流路の変遷が、いくたびか繰り返されるうちに、円山川本流の堆積も加わり、国府平野の沖積化が促進され、祢布ヶ森や水上あたりに、米作りの場が営まれてきた。このような湿地帯こそ、当時の最良の米作り地帯だった。それも、その初めは少人数が、小規模に水田を作っていたもので、このようにして、沖積平野の開拓が始まりだした。祢布ヶ森東遺跡から、さきにもふれた如く、一メートル幅の溝の中から古墳時代前半の土器が多量に発掘されている。時代的に考えれば、祢布ヶ森遺跡の発展の様相でもある。沖積平野の開拓が進んでいる。それは、やがて水上高床倉庫が建築されるほどに発展する。これは、耕地が拡大され、人々が集中し始め、ムラというものが成立し、農業生産物に余剰ができかかったことを示している。しかし、水上の場合には、山崩れによつて、折角、嘗嘗として開拓された農耕地が、一帯に押

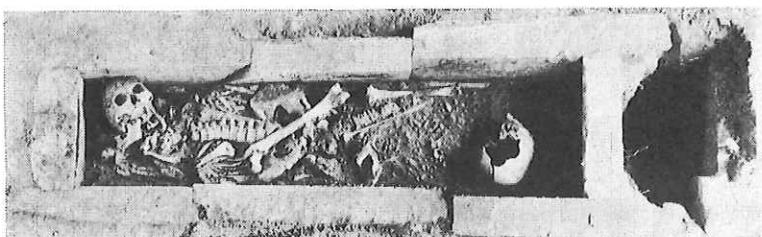


写真33 羽根山古墳出土の石棺と人骨

しつぶされている。これは、この頃の住民にとつては大打撃だつたろう。この土砂流の堆積の上に、新たな耕地が築かねばならない。加えて、八代川は、いくたびか氾濫を繰り返しては流路を北へ南へと変えて、そのために水はけを失して、荒原のような低湿地が、そこかしこに取り残されていことだろう。

さて、日高東中学校の北側の羽根山山頂に、五世紀の終りごろと見られる古墳が見つかった。の中には石棺が埋れていた。この石棺は、阿波式石棺と呼ばれるもので、二重の箱式石棺だった。の中に、二体の男性の人骨が納まっていた。この主こそは、土砂流に荒れ果てたこの水上地区の基盤・排水整備・土地改良の促進を積極的に計つた人だつたろう。彼は、かくて、水上の地に黄色い稻穂が波打つ姿を、いつもこの高所から眺めわたしたことだつたろう。そして死んだ後も、見守つているのだった。土砂流に荒廃した水上の地に、水田作りの場が再び選定されるまでに百年の年月が経過していだし、それは多くの労働力を投入して達成されたものだった。この勢が加わっていくと、経才力を基盤として、軍事力・政治力の優位者が現われ始める。五世紀の頃は、この勢が日本の各地で活発になる時で、とりわけ、奈良盆地・大阪湾沿岸附近では、集中的だった。壮大な前方後円墳が作られている。但馬では、円山川の支流、出石川流域附近や円山川の中流八鹿附近や、上流和田山附近に、この頃の古墳

が出現している。すべて、大型古墳だ。とりわけ、出石川流域に見られるものは、長持型石棺が埋蔵されたようだ。この長持型石棺というのは、大型の切石に溝を付して、底石・側石として長持状の石棺を作り、かまぼこ型の蓋石をしたもので、帝室の陵のような大型古墳のみに使用されていたものだ。出石川流域にこのような長持型石棺が発見されたり、また円山川下流域の城崎町二見でも家型石棺が検出されるなど、但馬でも最大級の勢力者が存在していることを示しているが、日高の場合、このような有勢者の姿を示す古墳は確認されていない。しかし、わずかに水上の地に中期古墳の末期、羽根山古墳にねむる有力者の姿が知られている。その勢力は羽根山古墳の規模から推して、出石川流域・円山川の中流・上流部に成長した有力豪族に比して、一段下の格の勢力者ようだ。ひとまわり小勢力者だった。

群集墳の出現

山本の羽根山古墳の埋葬法は、既に述べた如く、二重の箱式棺だった。板状または塊状の石材を数個組み合わせて箱状になし、この中に人体を埋葬し、蓋石を置いたもので、地面に堅に穴をうがつて作ったものだった。またこのころの埋葬法には、堅穴式石室といつて地面を掘り下げ、割り石などを四壁に積んで天井石をのせて、その上に土をかぶせるやり方もあった。このようなやり方は、一体一回しか埋葬ができない。この山本の羽根山古墳が築営される少し前の頃から、つまり中期古墳時代の中ば頃から、横穴式石室を持つ古墳が出現し、次の後期古墳の時代には、大流行した。それは、普通棺を納める玄室^{ゾンジ}と、それえの通路である羨道^{サンド}からなるもので、玄室の入口の玄門、羨道の入口の羨門を開閉することによつて、何回でも追葬が可能という施設だった。



写真34 剑 (馬場ヶ崎古墳出土)

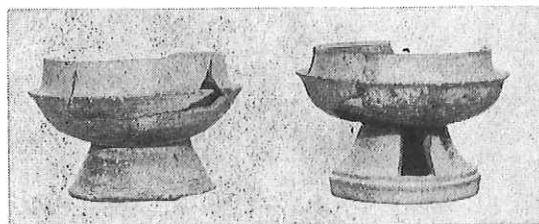


写真35 高杯 (訓原古墳出土) (大江 茂蔵)

さらに、後期古墳になることのような構造上の変化に加えて、数の上で変化が起きている。但馬の古墳の総数は、約三千基確認されている。その中で前期・中期の古墳は今のところ約二十基ぐらいだ。

日高町域は、古墳の数からいえば、豊岡市約千二百、日高町七百と豊岡市に次いで二番目に多い地帯に当るとはいうものの、豊岡市の市域には、中筋地区が加わっている。ここは、もともと氣多郡の郡域だし、この地には大師山古墳群という但馬での有数の群集墳が存在している。従って、律令制時代の郡別で、古墳の数を数えると、この大師山古墳の分が氣多郡に入ることになるから、その数は九百余となる。氣多郡は城崎郡と並んで、古墳の密集地帯だといえよう。調査が進めば、まだ増える可能性は十分にある。ところで、この氣多郡の九百基近い古墳の中で前期古墳はといえば、何一つ検出されていないし、中期古墳はその末期の羽根山古墳をはじめ、上郷の満仲谷古墳、鶴岡の馬場ヶ崎古墳、神鍋の訓原古墳が知られているに過ぎない。日高町域の古墳、即ち氣多郡の古墳は、そのほとんどが後期古墳ということだ。

また、この後期古墳になると、一般に個々の古墳は、径十メートルから三十メートル程度のもので、小型化しており、平地に接近した山の尾根や段丘地帯、谷川を狭んだ山の裾などに小

集団をなして築営されている。時には一つの古墳に数体の遺骸が埋葬されていることもある。それがまた、いくつか集つて群の様相を示している。この状態を群集墳と表現しているが、日高町の町域の場合この後期古墳の殆んど大部分が群集墳を形成しているのである。さて、この程度の小型の墳墓なら、十数人の人数で、二ヶ月もかかれば築営は可能のものだ。前期や中期の古墳がその地の首長のものであつたのに対し、首長にひきいられる集団の内部で有力な豪族が独立していくようになり、自己の墳墓を持とうとしてくる。今までの墓は権威のしるしであったのに対して、この権威のしるしを自己の墓所にとり込んできている。そこで、古墳が一気に爆発的に作られ始めてきた。とはいえ、外形的な様式の真似をすることはできたが、規模の点では、小さなもので満足しなければならなかつた。

楯縫古墳

一般に、後期古墳は群集墳を形成し、小型化していくはいるが、中には、極端に大きな石材を使用した横穴式石室墳が築営されている場合もある。但馬では、養父町の大籜に兵庫県下でも十指の中に入れてよいような巨石墳が二基も存在している。日高町の町域にも、養父町の巨石墳に負けぬような巨石墳がある。それは楯縫古墳だ。群集墳にねむる主が、家族集団の統率者であつたのに対して、この巨石墳に葬られた人は、この群集墳を統合した広い地域に君臨した人だつた。前期、中期の古墳時代から徐々に力を貯えていき、この後期古墳時代になつて、名実共にこの地域の小首長に君臨した人だつた。

さて、楯縫古墳は、鶴岡小字森垣に所在している。円山川東岸の標高三十七メートルの丘麓斜面を切断して形成されたもので、出土の土器から見て、六世紀の末、つまり後期古墳の中でも終りの頃の時期に築営さ

表9 古墳比較表

古 墳	所 在 地	全 長	玄 室		
			長	幅	高
襟 裏 塚 古 墳	養父町大藪	10.85m	5.95	2.73	3.5
將 軍 塚 古 墳	〃	11.10	7.05	2.03	
楯 縫 古 墳	日高町鶴岡	13.00	5.00	2.60	3.4



写真36 楯縫古墳全景

れたものだった。

楯縫古墳の主体部は、西側に開口する両袖式の横穴式石室である。石室の規模から見ると堂々たる巨石墳だ。古くから盗掘を受けていて、遺物の大多数は散逸しているが、昭和四十九年（一九七四）の発掘で直刀や轡や土器が出土した。

登り窓の窓跡

先に、山本の羽根

ばれるものになっていた。素焼の土器ではあるが、朝鮮半島の新羅焼の系統を受けたもので、灰色、灰黒色をなし、千度以上という高温で焼き上げられている堅緻な土器だ。叩くと金属音に近い音を発する。中期古墳時代の後半に現わるただし、その初期の須恵器は、まず大阪府南部の陶邑で起つた。須恵器は、そ

山古墳から出土した土器は、土師器といった。楯縫古墳から出土した土器は、土師器といった。楯縫古墳から出土した土器は、須恵器と呼ぶ

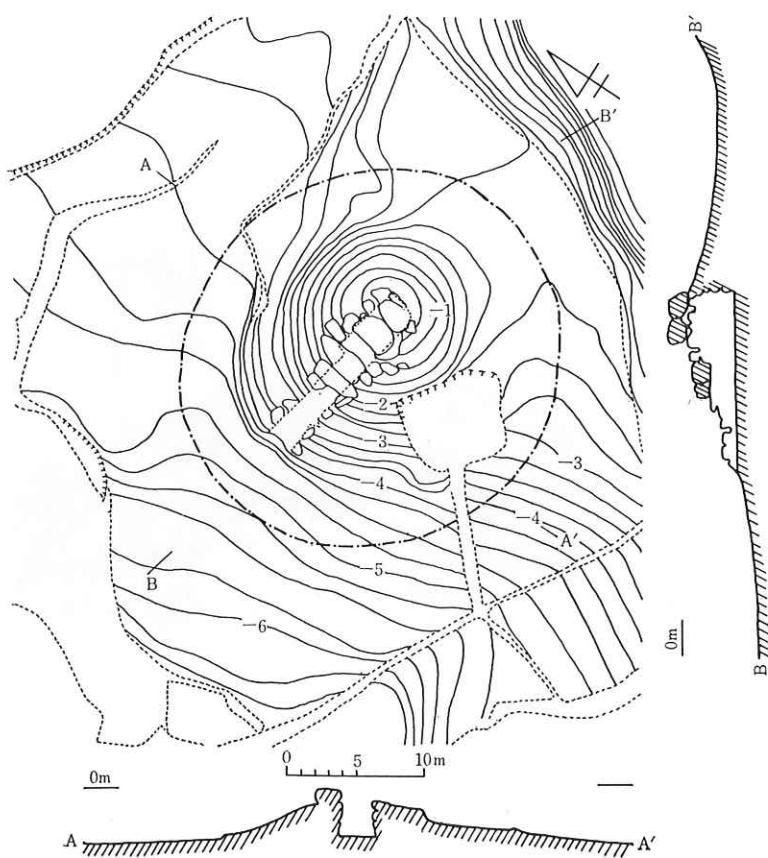


図19 植縫古墳外形実測図

第一部 原始一古代

図20 植縫古墳石室測量図

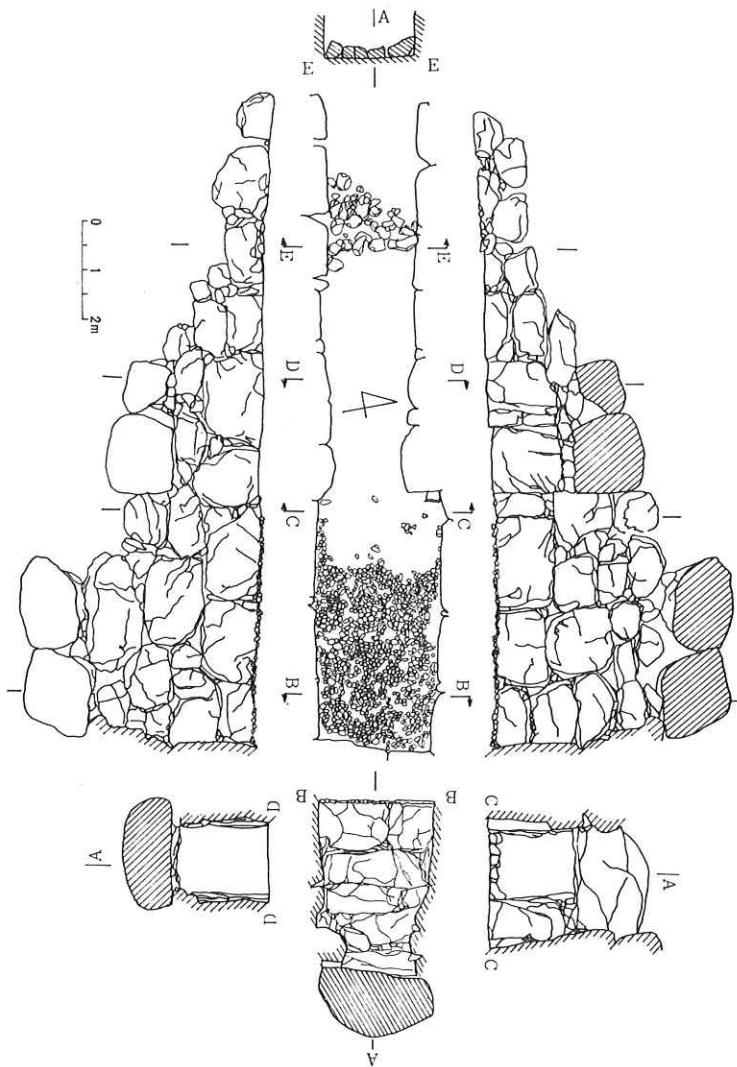


表10 須恵器窯跡一覧表

遺跡名	所在地	立地	遺跡概要
宮ノ谷窯跡	中小字宮ノ谷	焼畑	登り窯 破片散在 破損
イチゴ谷	中小字イチゴ谷	谷	ク
小河江	小河江	谷	ク ク
ナラ谷	上郷小字ナラ谷	麓	ク
菖蒲谷	鶴岡小字菖蒲谷	麓	(土師) 消滅
棚田	日置小字棚田	麓	登り窯 破片散在 破損

の初め、ここが供給地となつて全国に行きわたつたらしい。この陶邑の初期須恵器と見まがう耳付きの高杯が、但馬では村岡町から出土している。

ところが、六世紀後半、つまり後期古墳時代の終り頃になると群集墳が盛行する状勢に相応じて各地で生産されるようになってきた。日高町でも、須恵器が自給自作されるようになり、いくつかのその頃の須恵器の窯跡が残っている。

上表のうち、菖蒲谷の窯だけが土師器の窯場であり、他の五カ所の窯場は、すべて須恵器の窯場で、このうち発掘を受けたのは、宮ノ谷窯跡であつた。一基の登り窯が遺存していて、その内部は階段状をなし、中央には、まだ窯出しをしていない須恵器がびっちりとつまっていた。

日高町域の古墳群

さて、後期古墳の時代の群集墳を詳細に見ると、同じ墓群の中でも規模や副葬品などに差異がある場合と、そうでなくて、ドングリの背競べの場合とがある。等質の古墳群といふのは、群集墳の中の支群の如き存在のものだろう。これらの支群がいくつか寄り集つて、一つの古墳群が形成されるのであって、これがその頃の一つのムラという存在単位を示すものであろう。そして群集墳の中の中心墓に葬られるような人たち

が、このムラにも等しい地域圏の首長的存在に立っていたことだろう。楯縫古墳のような巨大墳に葬られた人の下位に属する人だったろう。

さて、日高町の町域の群集墳とこの支群との関係から次のように分類して見たい。

この表11は、地域的な近接関係のみを指向した機械的な分類で、いくつかの支群相互間の時代的な関係を比定した上で分類したものではない。ましてや、群集墳の中心墓を探し当てきらなものである。

この表を見て、まず注目しなければならないのは、標高三百メートル級の地点に数多くの古墳群が存在することだ。現在の感覚からすれば、三百メートルの高地に稻作が営まれていても、別段不思議ではない。しかし、祢布の低平部に稻作りが行われだしてから、約三、四百年近くたった、この後期古墳時代に高地農業を經營しようとする、数多くの試練にぶつからねばならなかつたろう。いくたびとなく、不作を経験し、やつとこの高地帯に稻作技術が定着するようになつてている。円山川と稻葉川の合流点附近の祢布ヶ森で米作りが試みられていた弥生時代には、到底、米が作れるとは考えられもしなかつた所に米作りが行われるようになった結果、このように群集墳が残されるようになつた。まず、三方の盆地で手がかりを得てから、広井の扇状地帯や、十戸、石井の開闢部に及び、最後には栗栖野へと広がつたものであろう。後述するように、この三方地区の広井、森山の高原地には、方形規格の農耕地が設定されている。地磁気の偏角面と方位とを組み合わせて考えると、四世紀頃に作られたものだろうという。この地に群集墳が出現する約二百年前のことだ。高原寒冷地帯に伴なう農耕技術上の困難さにもかかわらず、この後期古墳時代には、この群集墳に見られるように、多くの人口を支える農業基盤が成立している。岩倉古墳群というのは、このようにして、恐

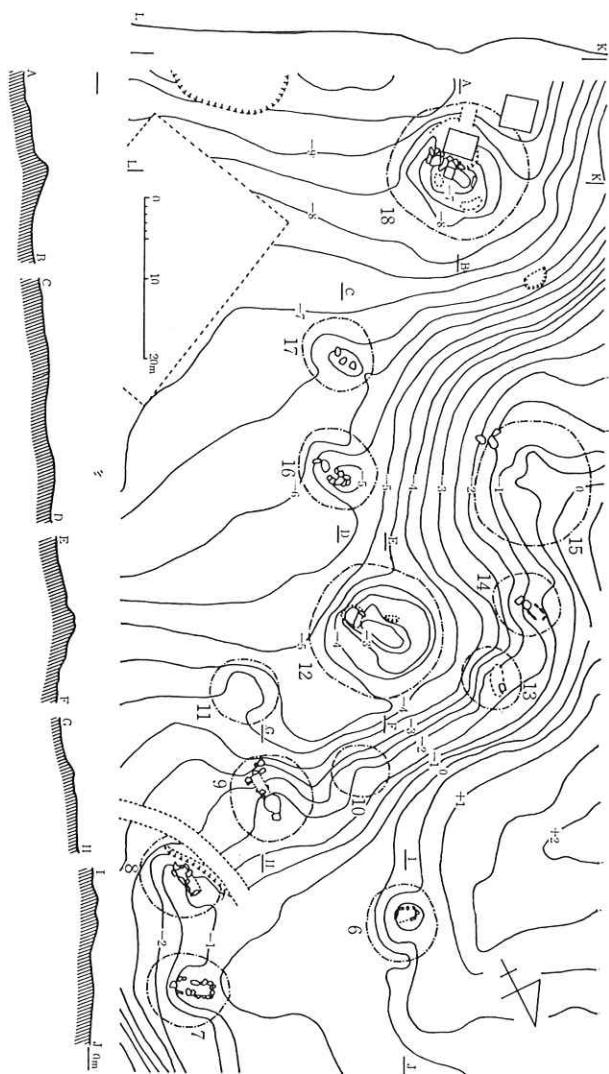
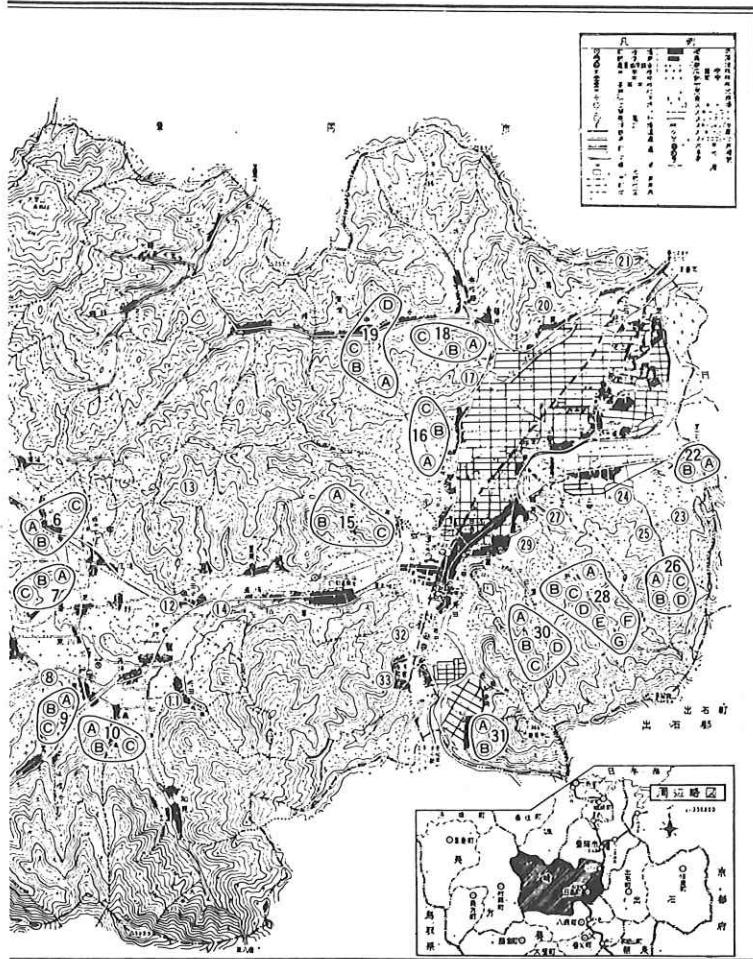


図21 岩倉古墳群の外形状測量図

第一部 原始—古代

表11 日高町古墳群一覧表

No.	古墳群名	基数	所在地	No.	古墳群名	基数	所在地
1	岩倉古墳群	31	栗栖野		さこ山古墳群C宮の谷	2	中
2	みだれ尾〃	4	神鍋		〃 D谷の塚	1	〃
3	訓原〃	1	〃	20	山の神	11	竹貫
4	しわがの〃	1	〃	21	歩危	6	上石
5	中野〃	11	柄本	22	宮谷〃 A東部	37	上郷
6	石井〃 Aがいた B石の辺 C小山	7 6 9	石井 十戸		B西部	27	〃
7	猪子垣〃 A野中 B猪子垣1 C猪子垣2	5 6 12	芝 猪子垣	23	才の谷	5	〃
8	大溪寺〃	11	栗山	24	池山	5	〃
9	觀音寺〃 A城山 B近江谷 C荒神山	9 9 16	山	25	岩谷	6	〃
10	森山〃 A森山1 B森山2 C赤城	3 16 7	森山	26	上郷川水系古墳群 A黒谷	3	〃
11	矢谷〃	5	佐田		B酒屋谷	11	〃
12	横山〃	5	久田谷		C小豆谷	3	〃
13	大谷〃	7	〃		D朝間岳	5	〃
14	市場〃	11	道場	27	来古墳群	6	鶴岡
15	祢布〃 A定谷1 B定谷2 C堂ヶ谷	8 14 9	祢布	28	多田野谷水系古墳群 A森垣	3	〃
16	尼ヶ堂〃 A尼ヶ堂1 B尼ヶ堂2 C奥ノ谷	20 11 7	山本	29	B丸山	2	〃
17	ミミイ〃	5	〃		C菖蒲谷	10	〃
18	耳谷〃 A耳谷 B大木谷 C西谷	12 7 2	藤井	31	D新林	5	〃
19	さこ山〃 Aさこ山 B馬塚	17 2	中	32	E腰細	3	〃
				33	F小谷	12	〃
					Gぬく谷	10	〃
					宮谷古墳群	9	〃
				30	日置川水系古墳群		
					A進美寺参道1	21	日置
					B〃	2	〃
					Cカリ谷	4	〃
					D中谷	3	〃
					A左鎌	4	赤崎
					Bシゲリ	8	〃
					上森	4	岩中
					寺谷	5	浅倉
					計	644	



群 分 布 図

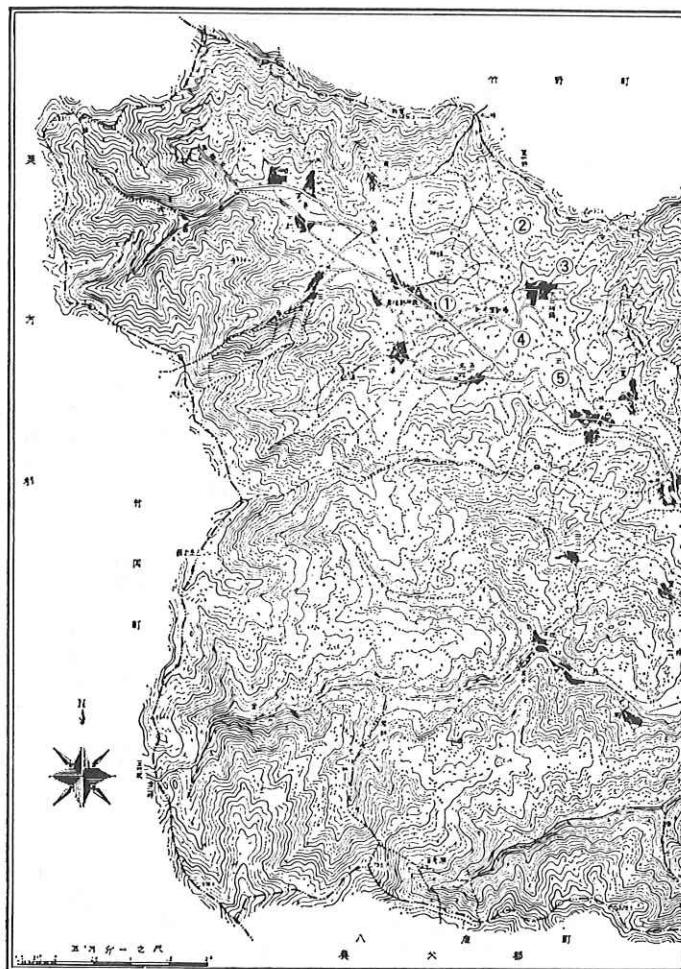


図22 日高町古墳

らく、栗栖野の中でも、大机山の麓部を稻葉川が南流する地帶に、ムラを形成するようになった農耕集団の墓所であろう。岩倉古墳出土の須恵器は、六世紀中頃のものが主流だ。平野部に有力豪族が出現し、巨大な楯縫古墳を作っている時期になつて、日高の高地部で米作りの場が設定されている。

次に注目したいことは、平野では、須留岐山系の北斜面地帯の谷間と、藤井、山本、水上、祢布にわたる山系の東斜面部に、夫々夥しい数の古墳群の存在が知られ、更に、今は豊岡市の市域に包摂されているが、もともとは氣多郡の郡域内であった中筋地区においても、背後の大師山に無数の古墳群が存在しているのに對して、低平部である国府平野や、中筋地区の低平野には、これという古墳群が存在していないことだ。このことは、この国府平野や中筋地区の低平地帯全般のことかしこに、農耕地が選定されていて、須留岐山系の北麓や藤井から祢布に到る山塊の東麓に営まれた、ムラムラから出作りが行われていたことを示すものだろう。水上遺跡では、既に前期古墳の時代に高床倉庫を持つまでに農業生産力を持ったムラが自然災害のために消滅して、その後百五十年程たつて、再びムラが作られていた。このムラを統べた首長は、羽根山古墳に葬られていた。山下の開拓地が一目に見られる地点だった。今や、後期古墳の時代に入ると、この羽根山古墳を取り巻くように、この地一帯に古墳が建設されているのは、引き続きこの地に農耕住民が居住していたからだ。ムラの生活がたくましい息吹をついているうちに、やがて古墳そのものが作られなくなつていく。政府が古墳建設に対して法的規制を行つたり、仏教の影響を受けて火葬が行われたりしたからだ。

かくするうちに、水上遺跡の前面の開拓地の景観に大変化が起きる。大和の政權が確実に、この但馬をおさえきり、統治機構として、国府という地方出先機関を設定したり、国分寺や国分尼寺の建設を行い始めた

からだ。

開拓が進んだこの低平野の一部は、惜しげもなく埋め立てが行われたことだろう。

山麓のあちこちに建てられていたと思われる高床の倉庫は、青、赤と柱の色も鮮かな、瓦を葺いた寺院の堂塔や国衙の諸施設の壮大さを眼前にしては、色あせたものと感じられてくることだった。この頃から、日本史の歴史は、考古学的な所見を離れて、文献的な史料によって展開していく。

注、埋蔵文化財の調査について

- 一、祢布ヶ森遺跡（蚕業試験場付近）一部発掘調査、昭和二十七年七・八月
- 二、馬場ヶ崎古墳（鶴岡）・発掘調査、昭和二十七年八月
- 三、宮ノ谷（中）須恵器窯跡・発掘調査、昭和三十年十月
- 四、水上遺跡（水上）・日高東中学校敷地となるため試掘調査、昭和四十一年七・八月及び同四十二年三～六月
- 五、羽根山古墳（水上）・日高東中学校敷地造成中発見され発掘調査、昭和四十二年八月
- 六、神鍋遺跡（神鍋）・発掘調査、昭和四十四年十・十一月
- 七、山宮遺跡（山宮）・大岡山ゴルフ場道路敷地となるための試掘調査、昭和四十四年十一月及び同四十五年九月
- 八、祢布ヶ森東遺跡（国分寺・祢布）・町民センター敷地となるため試掘調査、昭和四十八年六月・七月
- 九、祢布ヶ森西遺跡（祢布）・国道三一二号のバイパス敷地となるため試掘調査、昭和四十八年八月及び四十九年三～六月
- 一〇、但馬国分寺跡（国分寺）・発掘調査、昭和四十八年八～十月及び同四十九年七、八、十、十一月、同五十一年三月
- 一一、森山遺跡（森山）・ほ場整備事業中に発見され試掘調査、昭和四十九年四月
- 一二、楯縫古墳（鶴岡）・測量調査、昭和四十九年八月
- 一三、岩倉古墳群（神鍋）・測量調査、昭和四十九年八月

第二章 考古学から見た日高町

- 一四、広井条里制遺構（広井・殿）県営ほ場整備事業事前調査、昭和五十年四月
- 一五、三女寺遺跡（土居）試掘調査、昭和五十年八月